



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 100
Issue Date	1938-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77657
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part35.pdf



日一十三月五年三十

芒亭書屋談叢

促成栽培禁止の御觸書の事

「徳川禁令考」卷四十四及び卷四十九に促成栽培禁止に關する御觸書以後のものであり、少くとも此等の御觸書によつて其が令を要する位に進んで居た事書の一つには次の様に書いて

芒亭書屋談叢

犬山で花火の大會でもあつたのであらう。それを養老あたりからワザ／＼見物に出掛けて行く人が電車の中で色々話して居るのを聞いた事がある。その老人の云はば花火の美學の講演を聞いて私は始めて花火にも味はへば深い味はひのあるものらしいと云ふ事を知つて寧ろ驚いたのである。

だが私が其の時最も驚いた事は、私等が平素餘り振り向きもしないこんなものでも私等が鑑賞の眼をそこに向ければ、全く夢想もしない世界がそこに展開するものではないのか。そしてそんな世界は私等の身邊に到るところにころがって居るのではないのか、と云ふ事であつた。

飛驒の山村で村の若者達が演じた獅子舞ひを見た時も私は同じ様な感慨にひたつた事がある。獅子舞ひも私は平素低級野卑なものばかり思ひ込んで居たのであるが、其時見た獅子舞は此私の從來の考へを一新するに充分なものであつた。

生き續けて行く限り新しい世界は次ぎ／＼に現はれて来る。然し新しい世界と云つてもどれも前から知り切つて居るものばかりで、只心を据へて見尙ほして見たと云ふ丈である。客觀の世界が變つたのではない、それを寫し現はす心の鏡が一枚づつ加はつて行く丈である。鏡がなければ見れども見え、聞けども聞えないのである。それは知識ではなく、謙虚な氣持ちが無いからである。新しい鏡が一枚加はつた時には天涯に今生れて來た様な謙虚にして而かも潑刺たる感じがする。

私は玄海灘の一孤島に育つたのであるが、私が中學の上級に居た頃、よく山に登つて感傷的な氣持ちになつた時の事を今もあり／＼と記憶して居る。

あの島の近海には歐洲航路や支那航路の優秀な汽船が相當頻繁に通るのであるが、夕方近くになると悉くの船室から明か／＼と電燈の光りがもれ文明の力が船の中に充溢して居るかに見えた。その頃私の島には電燈もなく沖を通る船の中の文化と比すれば何十年も遅れた生活様式を持つて居た。

私が山の上で感慨にひたつたのは、あの船には最新の文化が運ばれて居る様に思はれ、そして此島のすぐの近くを通りぬけながら通る度に島はおいとけぼりにして居ると云ふ取り残される者の哀愁である。そして自分達の生活から随分距離のある様に思はれるあの船の中の文明の精粹を色々想像したのであつた。此哀しみ驚きの中に私の心の中には、現代文化の精粹を寫し現はしたい鏡が一枚何としても準備された事と思ふのである。

然し其鏡は無限の興趣を含む人生を寫し現はす無數の鏡の中のはん一枚に過ぎなかつたのである。生きて行く楽しみはそんな鏡が一枚づつ加はつて行く事である。(芒亭)

す間數旨前々相觸候趣も有之料理茶屋等に而は競合買求高はきうり茄子あんげんさうげに而仕立或は室之内江炭團火修を導く基に而賣出し候ものと唱候野菜類決而作出し申間買いたす間數候尤魚鳥之儀は費し多分之失脚を懸飼込仕立成候若相背候もの有之におゐ

領主地頭より可相觸候迄之通可被心得候

相當に進んだものであつた事れのもの賣り出すと云ふのして禁止した理由はそれが参野菜でも魚鳥でも自然の供給謂タイム、バリューを高める産力を有効に用ひる以所でな今日國民の生産力の統制が叫れる話である。

な促成栽培禁止の法令が今日は必ずしも考へ難い事ではな贅澤と云へば明らかに贅澤なものではあるまい。國民とし

同けられるなら、國家の爲にして今日國民の餘力は尙ほ充

じあらうが、國民として其覺

四百年も何千年もの間私等のの修正。その修正の總掛り等等はかくの如き先輩の勞をて毒を食得る餘裕を持つ國の。(芒亭)

高等農林學 14.5.24 圖書館